

郷土かみのかわの歴史・文化財

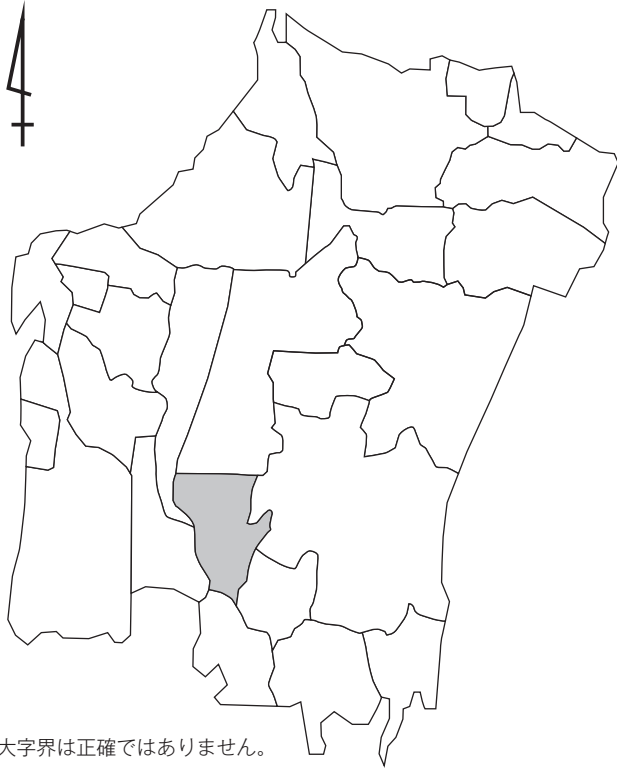
上三川の地域と歴史 下蒲生

下蒲生は、町のほぼ中央部南側、田川左岸の低地に位置しています。地区の東側を無名瀬川、中央部を赤沢川、西部を温川が南流しています。蒲生村が上下に分かれたのは、康暦年間（1379〜1381）と伝えられていますが、江戸時代を通して下蒲生

村と呼ばれ、初期は烏山藩領で、元和8（1622）年から幕府領となります。その後、幕末まで下総国関宿藩領、幕府領および大久保氏・近藤氏・鈴木氏の旗本領となりました。また、日光社参りや参勤交代などで街道の交通量が増加した際には、石橋宿の

は一人倍熱心でした。そんな吉茂に転機が訪れたのは13歳の時です。田村家の苗代が猪によつて踏み荒らされてしまいました。減収を覚悟しつつ、しかたなく残った苗を少しずつ植えたのですが、いざ収穫の時期を迎えると田村家の収穫は他のどの田よりも多かったのです。吉茂は、薄植えにしたことで収穫が増えたのだと気づき、以後、様々な作物で種の選び方や蒔く時期、肥料のやり方などを工夫して収穫を増やす研究に取り組みました。51歳の時、家督

を子どもに譲った吉茂は、これまでの実践的な研究成果を一冊の本にまとめます。61歳の時に江戸で出版されたその本こそ『農業自得』です。以後、吉茂は明治10（1877）年に88歳で亡くなるまで多くの書物を著しています。農民的視点で実体験に基づいた合理的な研究成果は、実験科学的といまなお高く評価され、現在の農業にも影響を与えています。



※大字界は正確ではありません。

と右衛門、北田対馬、八反田二郎左衛門、八反田外記、釈加ヶ原主税、釈加ヶ原八右衛門の6名の名が記録されています。このうち、本田与右衛門を初代とする旗本近藤領の名主・田村家は、六人百姓の筆頭で下蒲生村の名主・肝煎を代々務めました。そして、田村家10代目当主である田村仁左衛門吉茂は、『農業自得』を著した人物として知られています。



田村仁左衛門吉茂の肖像